

ゆりかごの歌
～幼竜の目覚め～



竜と人の共存の象徴であるマーラ・ビビ。彼は竜に翼を与えられた最後の人間だ。その偉業を讃えられ、遥かに時を越えた今も神話として語り継がれている。

『パパー。マーラ・ビビはいい人なの？』

ヒヨコのような毛色をした小さな竜は、くりくりとした瞳を父親に向けた。頭から生えた平たい耳を、羽のようにぱたぱたと動かす。4本の脚もしっぽもまだ短い、それがぬいぐるみのような可愛らしさに繋がっていた。

今日はとても天気がいい。ヒヨコ色の幼竜と、その父親が寛いでいる原っぱにも明るい日差しが降り注ぐ。

父親は生まれたばかりの子供を抱き締めた。

『いい人かどうか、一言で表すのは難しいなあ』

『どうして？』

『竜にもいろんな性格の竜がいるし、いい竜にも悪いところがあるだろう？人もそれと同じだよ』

『うーん…。でもマーラ・ビビは竜と人の架け橋なんですよ？わたちはいい人だと思うなあ』

小さな竜は舌足らずな言葉で父親に意見した。

そのとき、柔らかい足音を立てながら近づいてくる竜がいた。ヒヨコ色というほどではないが、小麦色の毛並みが、幼竜と同じくぬいぐるみのようなのだ。その口には果物がなった枝が加えられている。枝を地面に置くと、優しい声で幼竜の父親に言った。

『またそんな難しい話を聞かせてたの？』

『ママー！』

黄色い幼竜はふわふわの毛を持つ母親の足元に転がり込んだ。

『おかえり、随分遠くまで行ったんだな』父親は果物を見ながら言う。母親は幼竜に頭を寄せた。

『天気が良いからつい遠出しちゃったわ。たくさん食べて』

『うん！ママ、ありがとう！』

まだ幼い竜は母親の苦労など想像するはずもなく、無邪気に果物を頬張った。しかし、そんな愛しい我が子を見れば、母親の苦労も報われるのだった。

『竜と同じように、人にもいろんな性格の人がいるんですよ？』

しばらくすると空腹が収まったのか、幼竜は思い出したように父親に聞いた。

『ああ。竜も人も同じだよ』

『それならいい人もいっぱいいるかもしれないよ。どうしていつもこんな山奥に隠れていなきゃいけないの？』

この質問にはさすがの父親も黙りこんだ。生まれて間もない子どもにどのように説明したら理解してもらえるだろうか。マーラ・ビビがいたのは遠い昔で、今や世界中の竜は減る一方。それも、人間の乱獲が原因だ。太古の時代に生きていた竜は体も大きく生命力も強かったが、自分

たちのような現代型の竜は、大きいものでも馬や牛ほどしかなく、寿命も30～40年ほどだ。

『ビビ。おまえはこれから先様々な人間と出会うだろう。その中で人間とのいろいろな関わり方を学ぶはずだ。その時に得るのが、おまえの答えだ』

幼竜は小さな口をぽかんと開けたまま父親を見つめた。母親は笑いながらヒヨコ色の頭を撫でる。

『もう。ビビにそんなこと言ったってわからないわよ。ビビ、私たちがあなたの名前にどんな願いを込めたかわかる？』

幼竜は母親に頭をすりよせた。どうやらかなりの甘えん坊らしい。

『わたちの名前...？あ！マール・ビビのビビだ！もしかして、神話のマールンと同じように、人間に翼をあげてほちいの？』

ビビははしゃいで小さな手足をばたつかせた。

『わたちマールンって特別なんだよね？人間に翼を与えられるのって、マールンだけなんでしょ？』

『そうよ。マール・ビビのマールは、マールンの友達っていう意味よ』

母親は可愛らしい我が子の仕草に思わず顔を綻ばせた。

『ビビ、マールンは人と竜の架け橋なのよ。あなたも神話のような立派なマールンになればいいわね』

『うん！わたし、立派なマールンになゆよ！』

そのときだった。

山奥に隠れ住む親子の幸せを壊すかのように、残酷な銃声が鳴り響いた。

それと同時に、父親の大きな体が地面に倒れる。

『あなた！』

母親がすがりつくと、父親は必死に叫んだ。

『人間が来るぞ！走れ！ビビを連れてすぐ離れろ！』

『でも...っ！』

ビビには何が起きているのかまったくわからなかった。ただわかっているのは、身の危険が迫っていること。とても恐ろしいことが起こること。

『愛してるよ。おまえもビビも。2人だけでも助かってくれ』

父親の体の下はみるみるうちに赤く染まっていった。

『パパ...？パパ、どうしたの？』

ビビの前では最後まで強い竜でいようと、父親は苦痛の表情をかき消した。

『良い子だ、ビビ。マールンとしての誇りを忘れるんじゃないぞ』

母親は溢れ出る涙を堪え、ビビの首を優しくくわえると、想いを振り切るように大空へ舞い上がった。

『ママ、待って！パパはどうすゆの！？パパ怪我してゆよ！』

偉大な父親は次第に遠ざかっていく。それでもビビが目を離せないでいると、木々の間から二足歩行の生き物が出てきた。その手には黒い棒のようなものや、大きな刃物が握られていた。こ

れから一体何をしようというのか。

ビビが地上の光景に気を取られていると、前方で再び銃声が鳴った。その瞬間、ビビの視界は大きく揺れた。

『きゃあっ！ママ、どうしたの！？』

母親はビビの言葉に答えることもできずに、そのまま地面に向かって落ちていった。

『ママ！しっかりして！』

母親が胸に抱え込んだおかげでビビは無傷だったが、母親は地面にぶつかった衝撃でどこか骨を折ったようだ。痛みに顔を歪めながら、ビビの背中をくわえ直す。

『ビビ、良い子にしてるのよ。絶対に何も見ちゃだめ。何も聞いちゃだめよ』

『わたし怖いよお。これからどうなっちゃうの？』

母親はビビを茂みに隠すと、優しい眼差しで見つめた。

『大丈夫よ。ここにいって静かにしていれば何も起こらないわ。さあ、目を閉じて』

ビビは目に涙をいっぱい浮かべた。

『やだ！ママも一緒に隠れてくれなきゃ嫌！』

『私もすぐに隠れるわ。でもそこは狭すぎるの。ね、目を閉じて。何があっても見ちゃだめよ』

『絶対？絶対ママも隠れゆ？』

『絶対隠れるわ。ビビ、大好きよ』

母親はそう言うと、傷ついた体を引きずり歩き出した。隠れるならいくらでも場所はあるのだが、ビビからなるべく遠ざかろうとするかのように、母親は歩みを止めない。やがて、周囲から足音が近づいてきた。

ビビが目を閉じることができずに母親の背を追っていると、その足音の主は姿を現し、母親を取り囲んだ。先ほど父親に群がった、2本足の生き物だ。ビビは今までに見たことのない生き物を目にし、恐怖に身をすくませた。母親が目を閉じるように言ったのは、この生き物を見ないためなのだろう。ビビは固く目を閉じた。耳を塞いでも2本足の動物が出す乱暴な鳴き声は聞こえてくる。母親を取り囲んで、何をしようというのだろうか。一瞬の隙をついたら、気をそらすことくらいはできるのではないか。その間に母親は逃げられるかもしれない。

ビビは恐る恐る目を開けた。刃物を持った2本足の生き物たちは母親を取り押さえるのに夢中になっている。背中から押さえつけ、強引に翼を広げさせようとしているようだ。

行くなら今しかない。

ビビが茂みの中から飛び出ようとしたそのとき。冷酷にも、母親の翼の根本に大きな鉈が降り下ろされた。